

**「芭蕉」使用の分水嶺  
—横溝正史『獄門島』論—  
A watershed of Basho' s Haiku for use in novels  
—A Study of Yokomizo Seishi' s “Gokumon-tou” —**

藤田 祐史  
FUJITA YUJI

摘要

This article examines how to use three Haikus in “Gokumon-tou (Gokumon Island)”, one of Yokomizo Seishi's mystery novels. In this mystery, a detective, Kindaichi Kosuke finds the truth of the serial murders. In those cases, each of the victims are compared to Haiku. For example, Yukie, she is the middle of three sisters, is compared to Basho's Haiku “Muzan yana Kabuto no Shita no Kirigirisu (How pitiful! Under a soldier's empty helmet, a cricket sings)”. Specifically, Yukie is compared to an old cricket related to white color because Basho's cricket is compared to an old soldier. Then, a big temple bell is compared to a soldier's helmet. What is this criminal doing? The criminal rediscovers the beauty of Haiku. In other words, the criminal plays with Mitate. As I have explained, Mitate is a kind of comparison, and in this paper I solve three mysteries with Kindaichi, and clarify the motive for crime. As a whole, this thesis offers a close reading “Gokumon-tou” focusing on three Haikus and the role of characters. In addition, I show the position of “Gokomon-tou” in the Japanese mystery or Japanese modern literature containing Haiku. “Gokomon-tou” is groundbreaking in these special tricks using Haiku. After this novel we find a lot of mystery writers using Haiku. Especially, Matsumoto Seicho utilize Haiku as a trick or the key to solving the mystery. Seicho knows the characteristics of modern Haiku in comparison with Seishi. He use the characteristics, namely Shasei (sketching) theory, going to famous sightseeing spots, literary coterie magazines, Haiku gathering and so on, in his novels. Then, Yokomitsu Riichi who is a contemporary of Seishi connects Basho's Haiku and Japanese fate. In contract, Seishi's Basho is released from the oppression. Seishi makes free use of Basho's Haiku, and accordingly “Gokumon-tou” becomes a watershed of Basho's Haiku for use in novels.

キーワード 横溝正史 芭蕉 見立 推理小説 Yokomizo Seishi Basho Mitate Mystery

1. はじめに

横溝正史（1902－1981）の長篇小説『獄門島』（1947－1948）において芭蕉の俳諧はどのように使用されているのか。『獄門島』では芭蕉と其角の俳諧が作中に殺人事件のトリックとして用いられ、探偵金田一耕助はその謎を解くべく奔走する。本稿では登場人物の視点に立ち、俳諧に注目して考察することで、金田一によって語られていない事件の謎＝趣向を解読すると共に、芭蕉の俳諧を使用する小説として『獄門島』が日本近代文学のなかでどのように位置づけられるのか、その位相を示すことを目的とする。

手順としては、次節で『獄門島』における登場人物たちが俳諧を用いることで何をしているのか、作中の「見立殺人」を具体的に論じる。第三節では、作中の真犯人と探偵を中心に俳諧との関係に注目し、いかにこの事件が企図され、解決に導かれるのか、その過程における登場人物の役割を考察する。以上、二節と三節が目指すのは、芭蕉と其角の俳諧を視点とする『獄門島』の新しい読解の提示である。最後に第四節では、作家論の視点を交えながら、前節までに検討した俳諧使用を示す『獄門島』が他の俳諧を使用する小説のなかでどのように位置づけられるのか、松本清張を中心とする推理小説と比較する。加えて、芭蕉の俳諧を含む近代小説とも比較することで『獄門島』の位相を定める。

『獄門島』は1986年及び2013年刊行の『東西ミステリーベスト100』（文春文庫）において、二度ともに国内編の第一位に選ばれるなど、日本の推理小説のなかでは既にカノンの位置を得ている。しかしながら、文学研究の先行論としては五味淵典嗣が「横溝正史と戦後啓蒙——『獄門島』試論」において、「敗戦直後の言説の場を思考するきっかけとなる可能性」<sup>1</sup>を秘めたテキストとして『獄門島』を捉え、同時代の「戦後啓蒙」言説との重なりを論じているほか、植木朝子や砂部史城がエッセイのかたちで犯行の一面を捉える例が見られる程度である<sup>2</sup>。植木や砂部の見解は第二節で事件の詳細を論じる際に改めて言及するが、『獄門島』はその高い知名度にも関わらず、前述の五味淵のような同時代の言説との相関を見出す例はあるものの、その内容の精微な読解や前後する文学を比較参照しての論述はされてこなかった。もっとも、横溝の小説に関わらず文学研究における推理小説は、「探偵小説は日本近代の諸相を照らし返す新たな表情をいくようにもみせてくれる」<sup>3</sup>という吉田司雄の指摘にも伺えるように、同時代の文化・社会を映し出す鏡としての扱いが目立つ。本稿はそれに対し、芭蕉の俳諧の使用という従来の推理小説を論じる際に用いられなかった視点から『獄門島』の精読を試みる。その上で、他の俳句・俳諧を使用する推理小説、芭蕉の俳諧を含む近代小説と比較をすることで、『獄門島』を考究する意義を広げてみたい。

## 2. 三つの「見立殺人」と複数の世界の喚起

小説『獄門島』は「終戦後一年たった、昭和二十一年九月下旬」（十頁）<sup>4</sup>、亡くなった戦友から託された手紙を届けるために、探偵の金田一耕助が瀬戸内海の「獄門島」を訪れる船中の場面からはじまる。金田一は手紙の宛先の一人である島の和尚の寺にしばし留まることになるが、そこに網元の家の子供たちが連続して殺害される事件が起こる。金田一が島を訪れた理由は、戦友の死を告げるためであり、もう一つの理由は戦友が危惧していた妹たちが命を奪われるという惨劇を起こさないためであったが、彼が守ろうとした三姉妹は次々と変死を遂げる。

以上が小説『獄門島』の梗概であるが、本節で問題としたいのは、その殺人事件の方法・トリックである。一連の事件には芭蕉と其角の俳諧が用いられ、事件の順に、其角の「鶯の身をさかさまに初音かな」、芭蕉の「むざんやな胃の下のきりぎりす」、「一つ家に遊女も寝たり萩と月」の句に見立てて、花子、雪枝、月代の花雪月の三姉妹が謀殺される。実行犯は犯行の順に、和尚の了然、村長の荒木、医者 of 幸庵であるが、この犯罪は実のところ、既に亡くなっている島の網元の嘉右衛門の意図によるものであり、和尚らはその計画の実行者に過ぎないことが後に明らかにされる。

嘉右衛門が企んだような俳諧に絡めての殺人は、推理小説では「見立殺人」と呼ばれ、マザー・グースの童謡に見立てて殺人が起こるヴァン・ダインの『僧正殺人事件』（1929）やアガ

サ・クリスティーの『そして誰もいなくなった』（1939）が著名である<sup>5</sup>。横溝自身、先行する二人の作家について言及しており、彼は『僧正殺人事件』に感銘を受けながらも、推理作家らしく同じ趣向は利用できないと一時期は考えていた。それがクリスティーの小説を知り、「クリスティーがやって許されるのなら、よし、自分もひとつやってみようと思いたったのが「獄門島」発想の端緒である」と後に告白している<sup>6</sup>。こうした作家の発言は俳諧による「見立殺人」の派生を示している興味深い、本節と次節で捉えたいのは、登場人物たちがどのように「見立殺人」と関わっているのか、その使用の実相である。

さて、「見立」とは多様な意味を内包することばであり、芸術上の表現技法としては、特に江戸時代以降、文学、絵画、舞台と、広範囲で使用されてきた。高橋則子は「見立」と「やつし」試論において、「見立」とは、あるものを別のあるもので表現することである<sup>7</sup>と明解な定義を示している。高橋は「近世中期以降は視覚的要素・謎解きの要素を増加させていった表現方法であった」<sup>8</sup>とも述べており、こうした傾向は『獄門島』における「見立殺人」にも反映されている。また、山崎正和は丸谷才一との対談のなかで次のように述べている。

比喩と見立てがどう違うか、私はポイントが二つあるような気がするんです。まず、「見立て」というのは必ず、一人の人間を他の人間にたとえるだけではなくて、ある情況そのものを思い出させる<sup>9</sup>

ここで重要と思われるのは、見立が何かを関連づけるだけでなく、「ある情況そのものを思い出させる」と述べている点である。すなわち、見立によって、その見立てられたものに伴う「世界」が喚起されることを山崎は指摘している。例えば、江戸期の絵画に鈴木春信の『仙人見立て童現美人』があるが、この絵の場合、江戸の町娘が中国の仙人として描かれるだけでなく、その背景に古い中国の景が描かれる<sup>10</sup>。すなわち、古き中国文化の「世界」が喚起されるわけで、その「世界」と江戸の町娘との「付合」にこそ妙味が生じている。そして、この「ある情況そのものを思い出させる」という見立の特性は、後に詳しく読み解くように『獄門島』における「見立殺人」にもどうやら反映しているのである<sup>11</sup>。以上、ここまでの見立についての言及を踏まえて、作中の三つの事件を捉えていきたい。

一つ目の殺人の検討からはじめる。第一に、三姉妹の末の妹の花子が「鶯の身をさかさまに初音かな」という其角の句に見立てて殺害される。見立としては、花子が「鶯」であり、身を逆さに吊るされることから「身をさかさまに」に通じ、また、この事件が連続殺人のはじまりであることから「初音かな」に重ねられる趣向となっている。それでは、なぜ他の二人ではない花子がこの俳諧に見立てて命を奪われ、なぜ和尚がこの句を使用する実行犯となるのか。

まず、なぜ和尚がこの「見立殺人」の実行者なのか。この理由として考えられるのは、殺人現場の寺に伝わる「梅の木」の存在であり、この古木の存在が其角の句による殺人を呼び起こしていることが推察される。つまり、俗に「梅に鶯、松に鶴」と言われるように、「鶯と梅」というのは絵画であれ、文芸であれ、型として流通している。よって、この殺人の計画者である嘉右衛門が鶯の句の割り当てを考えると、其角の江戸の梅に対し、我が島の自慢の梅の古木を持つ和尚に、この句を託したのではないか<sup>12</sup>。

そして、その梅の木に吊るされるのがなぜ花子なのか。これについては先行論で植木朝子が能の『道成寺』について言及しているが<sup>13</sup>、例えば歌舞伎の『娘道成寺』の場合、鐘が失われ

て久しい道成寺に新しい鐘が送られ、鐘供養が行われる。そこに訪れる白拍子の名が「花子」であり、彼女は鐘に飛び込み、蛇に変化する。この点については、本文にも「花子は梅の枝から、彼女自身が怪奇な錦蛇のように、まっさかさまに吊るされているのである」（六十九頁）という叙述があり、蛇になる符号を示す<sup>14</sup>。すなわち、花子は単純に其角の句に見立てられるのではなく、先行する文化の「世界」を背景に逆さ吊りにされるのである。このように「世界」の重層性を把握した上で、次に起こる二つの殺人についても同様に読み解いてみる。

二人目の被害者である雪枝の「見立殺人」では、芭蕉の「むざんやな兜の下のきりぎりす」が使用される。見立としては、無惨な殺害であるから「むざんやな」、寺の釣鐘の下に遺体が置かれることから「冑の下の」に通じ、そして、雪枝から「きりぎりす」が連想される趣向となっている。下五の「雪枝」と「きりぎりす」がどのようにつながるのか、が一見難しい見立である。

では、なぜ村長の荒木がこの事件の実行犯なのか、から先に考えると、ここでは村長の恋の恨みが利用されていることが推察される。つまり、村長は殺害された雪枝の母である役者時代のお小夜に惚れていたが袖にされ、彼女を恨んでいた。この犯罪を計画した嘉右衛門は、役者としてのお小夜を村長が殺害する見立としてこの句を彼に割り当てたのではないか。

それから、なぜ雪枝が殺されるのかについては、芭蕉の「むざんやな」の句について考えると、この句は上五中七で提示された情報が下五で意外性のあることばに結ばれることで面白みを発揮している。芭蕉の場合、この句は『おくのほそ道』の途上で斎藤別当実盛の兜を前にして詠まれたことになっており、その背景には実盛の首実検がある。すなわち、「むざんやな」は『平家物語』における登場人物の台詞「あな無慚や」の模倣であり、兜の下の…と中七で期待をさせて、歴史的事実としては実盛の首があるのに対し、きりぎりす（コオロギ）が鳴いている、という趣向である<sup>15</sup>。『獄門島』における嘉右衛門は、ここで兜の下の…と期待をさせて、そこに雪枝の姿態を置くのであり、これは実盛が白髪を黒く染めて戦に出ていた故事との関連であろう。この点は、先行論でも「実盛の逸話を背景に置けば、白髪の白から「雪」を連想することも可能である」<sup>16</sup>と指摘されている通り、嘉右衛門による兜の下に雪＝白を置くねらいが思いやられる。この事件もやはり芭蕉の「世界」、そして、その芭蕉の句の背景にある実盛の悲劇が重ねられているのである。

つづけて、「一つ家に遊女も寝たり萩と月」の句の場合の重層性を捉えていく。この第三の事件は、「一つ家」と呼ばれる祈祷所で起こる事件であるから「一つ家に」、白拍子の装いの女が横たえられるから「遊女も寝たり」、そして萩の花を振りまかれた月代の殺害であるから、「萩と月」というように、一見してわかりやすい、半面では句と対象が一致している分、その面白みが解しにくい趣向である。

なぜ医者 of 幸庵が実行犯なのか、から考えると、ここには彼の商売の恨みが関連していることが推察される。医者 of 幸庵は月代の母である祈祷者時代のお小夜に自身の患者を奪われ、彼女を恨んでいた。嘉右衛門は祈祷者としてのお小夜を幸庵が殺害する見立としてこの句を彼に割り当てているのではないか。

そして、なぜ月代が殺されるのかについては先の「きりぎりす」の句と同様に、この句の引き起こす「世界」を思い描くと句と被害者の関連性が鮮明になる。芭蕉は『奥の細道』の途上、遊女から伊勢参拝への同行を頼まれ、それを断つての後に同句を詠んでいる。この芭蕉に同行を求めた女たちの伊勢参拝が実現されたのかは定かではないが、遊女の同行の願いは叶えられず、月代の願いも同様に途絶されるわけで、「叶えられぬ女の願い」という一致がこの殺人の見

立であろう。祈りを得意とする白拍子姿の月代は、この句に絡めて殺されなければならなかったのである。

本節では見立が「世界」を喚起させることを確認した上で、個々の殺人劇を追ってきた。各々の事件には、花子と和尚の場合には歌舞伎や能の『道成寺』の世界、雪枝と村長の場合には『おくのほそ道』と実盛の世界、そして、お小夜と村長の恋がらみの因縁の物語、月代と医者の場合には『おくのほそ道』に加えて、お小夜と医師の金がらみの因縁の物語、というように探偵金田一によって明言されていない謎＝趣向があったのである。無論、こうした謎＝趣向は横溝正史の嗜好、例えば戦時中の捕物帖の執筆や戦後の『犬神家の一族』（1950 - 1951）に見られる歌舞伎趣味、あるいは『獄門島』が書かれる年（1947）の初めの日記に見られる「元旦や今年は何んで年をとる」<sup>17</sup>の作句など、彼の江戸文化への通暁に鑑みるならば、表明はされずとも作家によって仕組まれていた謎＝趣向であると考えるのが自然であろう。『獄門島』は作中で金田一に説明される以上に、前時代の言説を「見立殺人」を媒介にして巧みに織りこんでいるのである。

以上、和尚ら三人の加害者と花雪月の三姉妹の被害者のそれぞれの句との関連性は、事件の際に呼び起こされる「世界」の重層性とあわせて本節で明示できたかと思う。では、そもそもこのような巧緻な趣向の殺人劇がなぜ企図され、実行されるのか。次節では、真犯人の嘉右衛門について、また、この事件における探偵金田一耕助の役割について考察したい。

### 3. 真犯人嘉右衛門と探偵金田一の役割

島の網元であった嘉右衛門がなぜこの犯罪を企んだのかは、小説中でほぼ説明されている通りであり、三姉妹の母であるお小夜への恨み、島における家の繁栄継続の渴望、そして彼の「通人趣味」という三つの理由のためであろう。なかでも、前節で彼の趣向に満ちた殺人を見てきたように、三つ目の理由の重みが察せられる。彼は「花雪月」という美を象徴する歌語を持つ三姉妹に、俗なる姿態を与える「俳諧」を企み、視覚的かつ錯綜的な美の再創造を行うのであり、こうした嘉右衛門の趣向は「江戸末期の通人趣味」、雑俳好きかつ芝居好きとして小説中で説明される彼の性格に叶うものである<sup>18</sup>。

なかでも雑俳と書いたが、嘉右衛門は和尚、村長、医者 of 三人と、床屋の清公と呼ばれる人物を加えて、以前から「かむり付け」、それから「何々見立てというのに凝りはじめた」（二百四十三頁）ことが作中に記されている<sup>19</sup>。本文によると、嘉右衛門（と、おそらく清公）が題を決め、嘉右衛門の眼に適うよう参加者たちが趣向を尽くし、評価を得んと努めていたのであるから、一連の殺人劇もその延長線上にあったのであろう。無論、和尚によって言明されているように三姉妹の殺害には嘉右衛門の遺言を受けての供養の意味合いもあった。そして、こうした雑俳の趣向は参加者の独創が求められるのが通常のはずだが、彼らの場合には、日頃から「床屋の清公がみんなに教えまわっているのだ」（二百四十三頁）とされているように、和尚・村長・医者 of 独自の独自性は問題とはならず、いかにして嘉右衛門を満足させるのか、が最大の関心事となっている。「花雪月」の殺人は原案が嘉右衛門によって提起され、和尚らはそれを実現してみせる役割に留まるが、こうした各自の役割は、常の「遊び」の習性が反復されているのである。

それでは、なぜかつての雑俳では重要な役割を果たしていた床屋の清公がこの殺人劇には加

えられていないのか。この殺人劇が嘉右衛門にとって自身の「なんともいえぬ美しい殺しかた」（二百七十八頁）と自負する一種の作品であった以上、その趣向を評価してくれる相手を必要としたであろうから、その潜在的な相手として床屋の清公が位置づけられていたことは推し量られる。和尚ら実行犯はあくまでも嘉右衛門ありきであり、彼の意図の実現が彼らの目標である。それに対し、嘉右衛門にとってはこれを評してくれる相手が必要であり、通人を自任する床屋の清公にはその役割が期待されていた。しかし、結果として彼はその任を果たすことができず（この奇想には入っていけず）、別の人物が嘉右衛門の企みを言明し、評価する役割を担うことになる。その別の人物こそが、探偵金田一耕助である。

「犯罪の共犯者としての探偵」とは推理小説を論じる際の常套文句であり、実際、金田一は島の大人物である嘉右衛門の趣向を理解し得る人物として事件に巻き込まれていく。それは実行犯の一人である村長が戦前に彼が解決した事件（「本陣殺人事件」）を新聞で読み、和尚にそれを知らせたことを発端とする。このとき、和尚が「発句の謎をとく」（二百七十九頁）役割を担う人物として、床屋の清公よりも金田一を意図的に選んだとも捉えられよう。そして、金田一は「発句屏風」を寝室に用意されるなど実行犯から「フェア・プレー」の扱いを受ける。また、和尚の犯罪後の描写では、嘉右衛門に見せることができない代わりに、村長、医者と並んで金田一には入念に殺人現場が提示されている。その場面を引くと、「おお、金田一さん、あれを見い、あれを見い」（六十九頁）、「二人とも御苦労じゃった。では、ひとつ、花子を、見てやっておくれ」（八十二頁）、あるいは、「あんたがた、あんたと幸庵さんに見てもろとけばもうええじゃろ。なあ、金田一さん、もうおろしてもええじゃろな」（八十三頁）といった具合である。その他の箇所でも、本来東北人である金田一が「獄門島」では清公のことばを借りて「江戸っ児」（百九十四頁）としてまなざされておられ、和尚たちは洒脱な趣向を解する江戸の客人として金田一をこの殺人に引き入れることで、嘉右衛門の遺志の一端である趣向評価の欲望に答えようとしているのではないのか。

さて、そうした役割を与えられた金田一であるが、なぜ彼は閉鎖性が強調される島にあって、嘉右衛門らの提起する謎＝趣向を解くことに成功するのか。この問いに答えるために参考としたいのが、鍋島弘治朗の『メタファーと身体性』における「メタファー理解」についての識見である。鍋島は「メタファー理解には、3つの段階が関わると考える。仮想スペースの創出、身体性の活性化、仮想から現実への写像である」<sup>20</sup>と述べている。見立もまたメタファーの一種と理解することは可能であろうから、彼の「メタファー理解」を見立理解として理解するとき、見立の謎を解いた金田一の思考の過程もまた明白にできるのではないのか。以降、鍋島の説く「3つの段階」に金田一の思考を重ねてみる。

第一に、思考＝推理の端緒は「仮想スペースの創出」であるが、これは俳諧の見立殺人によって喚起される「世界」の創出にも通じていよう。和尚らは発句屏風の用意、殺人現場の提示等の行為によって、金田一を現実の世界とは異なる仮想の世界へと誘いかける。

仮想スペースの創出は、空想とその共有への誘いである。話し手と聞き手は、事実を述べるといふ言語用法から解き放たれ、共同的な想像と楽しみの世界へ踏み出すことになる。つまり、メタファーはコミュニケーションの枠を拡げる。<sup>21</sup>

と鍋島が書いているように、仮想への導きは交流の可能性の拡張でもある。金田一の場合、現実の世界としては余所者を受け容れない排他的な「獄門島」にあって、殺人劇の喚起する仮想

の世界に踏み入ることで、和尚らと、あるいは嘉右衛門と、交流する一員となる。

そして、鍋島が示す「身体性の活性化」「仮想から現実への写像」という第二、第三の段階についても、「仮想空間に入り込み、その世界を眼前のものとして思い浮かべ、対象に成り切ることによって、推論、イメージ、情動が喚起される」<sup>22</sup>、あるいは「仮想フレームの中で身体化され、活性化された意識は、視角イメージなどの知覚イメージ、情動、そこから得られる推論を「現実」に投射する」<sup>23</sup>といった言説を参照するとき、金田一の推理の過程が明確なものとなる。すなわち、探偵金田一は目の利いた参与者として、見立の喚起する「世界」に入りきり、そこで得られる推論を手がかりに、事件の謎＝趣向を暴く。一方、ここで開かれる交流はあくまでも金田一が参与した仮想空間の範囲に限られており、その実、金田一が心を通じ合わせたいと願った島の「早苗」という女性に対する「耕助は早苗さんにむかって、東京へ出る気はないかと誘うてみた」(二百八十四頁)という彼のプロポーズは、交流の契機となるメタファーの欠如から拒否されてしまう。共有する仮想空間を持たないことで、金田一は島の警官である「清水さん」と同様、余所者の位置に留まるのである。

以上、本節では真犯人及び探偵の事件における役割を考察することで、芭蕉及び其角の俳諧との関連性を確認してきた。嘉右衛門にとって「見立殺人」は彼の「江戸末期の通人趣味」の延長にあり、死に臨んでの集大成を示すような自信作であった。そして、それが作品であると自任されるとき、潜在的に評価者が必要とされた。嘉右衛門の遺志を継ぐ和尚は金田一を同じ仮想を共有し得る者として選び、彼に仮想への参入を誘いかける。結果として金田一は三姉妹の殺害後にはあるが、嘉右衛門の意図を見抜くことに成功し、趣向の解説を担う<sup>24</sup>。

また、ここまでの俳諧を視点にした精読によって、先行研究における「敗戦直後の言説の場」としての『獄門島』以上に、俳諧・歌舞伎・島の過去の出来事など、「前時代の言説の集積」としての『獄門島』が浮かび上がる。本稿ではその実相を「見立殺人」を具体的に捉えることによって解明してきたわけだが、では『獄門島』とはそのように「封建的な」時代の文化との強い結びつきを示すだけの作品であるのか。次節ではここまでの『獄門島』の読解を、本稿の課題である「芭蕉」使用の問題意識に接続することによって、『獄門島』を考究する意義を広げてみたい。

#### 4. 俳諧、そして芭蕉を解放する

『獄門島』における俳諧の「見立殺人」が清新な試みであったことは、同時代評として江戸川乱歩が「最もあとに残るのは俳諧と殺人の結びつけの妙味である。これは前人未踏の創意である」<sup>25</sup>と発言していることから窺い知ることができる。その「妙味」についてここまで作中の「見立殺人」の読解から具体的に捉えることを試みてきたのであるが、本節では他の小説との比較からその理解を目指したい。すなわち、横溝正史『獄門島』の俳諧使用は推理小説においてどのように位置づけられるのか。また、推理小説以外の芭蕉の俳諧を含む近代小説と比較するとき、どのような特異性が明らかになるのか。本節ではこの二つの視点から比較検討を行い、前節までの分析によって提示した「前時代の言説の集積」としての『獄門島』という見方に加えて、それとは別の『獄門島』の側面も探究していく。

俳諧、あるいは近現代俳句を用いる推理小説との比較からはじめる。推理小説が専ら探偵小説と呼ばれていた戦前にも、乱歩が既存の文学作品と並び立つ探偵小説の登場を願った論考の

題目が『一人の芭蕉の問題』であったように、あるいは乱歩同様探偵小説普及の立役者である小酒井不木が句作に熱心であったように、俳諧趣味と探偵趣味の結びつきはその黎明期から存在している。その時期の細密な追究も興味深い課題ではあるが、推理小説における俳諧使用という点に注目するなら、やはり横溝の『獄門島』が嚆矢となる。そして、『獄門島』以降の推理小説では俳諧及び近現代俳句の使用が多々見られ、齋藤慎爾編『俳句殺人事件』（光文社文庫、2001）のような俳句に関わる推理小説のアンソロジーも編まれるほどである。しかしながら、例えば芭蕉の俳諧の使用例を見るに、深谷忠記『「奥の細道」不連続殺人ライン』（2013）、風野真知雄『「おくのほそ道」殺人事件』（2017）等にもそれぞれ芭蕉の俳諧を活用する工夫は見られるものの、多くの場合、トラベル・ミステリとして芭蕉の旅した舞台を借りることを主な目的とし、横溝のような複数の世界を喚起する巧緻な趣向の作品としては成り立っていない。

比較参照として芭蕉に限らず、その他の俳諧、俳句の推理小説における使用例を以下、幾つか挙げてみる。短篇では、先に挙げた齋藤慎爾編『俳句殺人事件』所載の諸篇に特徴ある例が多く、例えば勝目梓『死の肖像』（2001）では蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」の句が、二人の女の間で揺れ動く男の心情の表現かつダイニング・メッセージとして用いられる。同アンソロジーに紹介されていない短篇としては、其角の「闇の夜は吉原ばかり月夜哉」の句が作中の謎と共鳴する泡坂妻夫『柵山訪雪図』（1978）を挙げておきたい。其角の句を「闇の夜は」で切るか、「吉原ばかり」で切るか、によって句の意に明暗の変化が生じることを指摘し、その「読み」がさらに驚くべき作中の趣向につながる好篇に仕上がっている。長篇に目を移すと、内田康夫『坊ちゃん殺人事件』（1992）では、俳句の同人誌が犯罪の伝言板代わりに使用され、そこに暗号的に載せられる俳句が事件の謎を解く鍵となる。それから、清涼院流水『コズミック 世紀末探偵神話』（1996）における意想外の「芭蕉」使用を挟んで、殊能将之『美濃牛』（2000）では、素人が詠んだ俳句が意図せずして犯行の目撃につながる。そこには「見たままを詠む」ことを勧める近代俳句の傾向が事件解決に活かされている。また、『美濃牛』では作中の前半で『獄門島』論が挟まれるなど、はっきりと横溝の先例を意識した内容になっている点も特徴的である。推理小説ではその後も、青春小説の要素を加えた水原佐保『青春俳句講座 初桜』（2006）における使用があり、あるいは鍋木蓮『東京ダモイ』（2006）ではシベリア抑留と句集を結びつけた政治性の強い謎が創り出されている。他にも点字の俳句（正確には「俳句」とは言えない五七五のことば）の使用される下村敦史『闇に香る嘘』（2014）など新たな俳諧・俳句の使用が継続されており、その総数は論者の把握している限りでも二十作品以上に及ぶ。また、トリックや謎解きに直接は関わらないが登場人物が俳句を嗜む例（結城昌治『長い長い眠り』の登場人物、あるいは内田康夫の「信濃のコロンボ」竹村刑事など）や、純然たる推理小説ではないが、丸谷オ一『横しぐれ』（1975）のように山頭火の句や日記をもとに主人公が謎に迫っていく推理小説仕立ての文学作品、さらには芭蕉や一茶を探偵役とする捕物帖の類を含むならば、俳諧を使用する推理小説の数はいっそう多くなるであろう。このように俳諧、俳句を使用する推理小説は数例を挙げるだけでも多彩であり、幾つかの作品では「俳諧と殺人の結びつけの妙味」＝複数の世界の喚起を実践しているわけだが、それでも一連の俳諧使用の出発点である横溝正史『獄門島』と一対一で比較し得る細かな点までこだわり抜いた仮想空間を喚起する使用例は出ていないのではないかと。しかし、ここまで言及しなかった作家で、俳句の使用をくり返した人物がおり、彼の使用過程を並べてみると、それらが横溝同様に趣向に富んだ使用例になっていることに気がつく。では次にその作家、松本清張の諸作品について概要を追い、横溝の場合と比較してみたい。

松本清張が俳諧、俳句に関心を寄せたのは、俳人の杉田久女をモデルとした歴史小説『菊枕』（1953）以降であろう。推理小説にも初期の『眼の壁』（1958）において、主人公の趣味に俳句を設定しており、謎解きの過程で俳句が、若干ではあるが解決の道筋を示す記号として機能している。短篇『巻頭句の女』（1959）となると、天涯孤独に見えた被害者の女性が俳句の同人誌に投稿していたことから、その音信不通に同人たちの疑問を生み、事件の解決に結びつくという結構が見られる。また、『時間の習俗』（1962）では、俳句は犯人のアリバイとして使用され、加えて、吟行という結社の行事が巧みに犯罪の過程に織り込まれる。それから『二つの声』（1968）では、犯人は俳句仲間たちと連句を詠み合う。この連句の場面自体は謎解きと有機的に結びつくのか疑問も残る使用法ながら、現代の連句創造の場を描く希少な例となっている。清張はその後、『聞かなかった場所』（1971）において、妻が句会や題材探しに出歩くという行為、あるいは俳句が偶然に映していたものが犯人の確定につながる写生の効用など、現代俳句に伴う特徴・現象を犯罪あるいは謎解きに活用している。それから、『喪失の儀礼』（1972）では、真犯人の俳句が早い段階で探偵役及び読者に示され、その詠み方に気づくならば（先の第三節の言い方に倣うと、犯人が誘いかける仮想空間に入りこめたならば）、犯行の謎が解けるという趣向が試されている。他にも、清張には『風炎』（後に『殺人行おくのほそ道』と改題、1982）という芭蕉の俳諧を使用する小説もあるが、残念ながらそこでの俳諧使用は後発のトラベル・ミステリにおける使用と一線を画するには至っていない<sup>26</sup>。しかしながら、以上の概観だけでも、清張の俳句使用の継続と工夫を知ることができるかと思う。そして、こうした清張の使用については期間の長さや数の多さ以上に、同時代における俳句の特性を活用している点に注目すべきであろう。彼の小説では、写生、句会、吟行、同人誌といった現代俳句を支える機能がトリックに、謎解きに、精巧に活用されている。横溝正史が『獄門島』において「封建的な」島に相応しい俳諧の「見立殺人」を創出したことと比較するなら、清張は「現代」に相応しい犯罪を書くために、同人誌のつながり、句会でのつながり、吟行でのつながりといった現代俳句が人を結ぶ機能に注目し、それを作中の謎に活かしたと言えよう。但し、仮想空間の喚起という点では、現代俳句を用いた清張の小説ではその効果は乏しい。芭蕉の俳諧から芭蕉の「世界」、加えて、芭蕉の俳諧が依拠していた物語、というように重層的な世界を喚起する横溝の使用例はやはり独特である。もっとも清張の俳句使用の実相について論じるにはさらなる詳述が必要となろうが、ここでは『獄門島』の使用の特異性を浮かび上がらせるのが目的であるから、上記の対比だけを確認し、次の比較に移りたい。

さて、『獄門島』における俳諧使用が推理小説の歴史において新しい試みであり、かつ後続の隆盛を促す使用であったことは見てきた通りであるが、では推理小説ではなく、他の俳諧を含む近代小説と比較するとき、『獄門島』のどのような特徴が明らかになるだろうか。

俳諧を小説に含む試みは、芭蕉の場合に限定しても、明治期から存在し、例えば幸田露伴の『露団々』（1889）では芭蕉の代表的な発句が各回のタイトルに使用されており、エピグラフのごとく回全体の内容を示唆する役割を果たしている。しかし、明治期における小説の俳諧使用は、同じ露伴の『對髑髏』（1890）や同時代の尾崎紅葉『風流京人形』（1888-1889）の場合であっても、作中の何かしら事柄の説明・強調のために身についた素養である芭蕉の句を地の文に引くという使用に留まり、小説の構造全体に関わる使用や、推理小説におけるトリックのような作品の要になる使用例は見られない。

大正期に入ると俳諧使用の自由度は上がり、登場人物の感情を表現するのに加えて、佐藤春

夫の短篇『窓展く』（1925）には芭蕉の俳諧を利用して、現代の俳文をつくらんとする意図も見受けられる。芭蕉の連句を吟く人の描写の見られる久保田万太郎の『きのふのこと』（1917）や、芭蕉の引用ではないが井月の句を引く芥川龍之介の『庭』（1922）なども、俳諧に通じた彼らの新しい散文創出の試みであっただろう。

昭和戦前に入ると、時局の変化も手伝って、作者の意図はともかく同時代の愛国精神や戦時下の美意識に「組み込まれる危うさを内包している」<sup>27</sup>小説として、岡本かの子『東海道五十三次』（1938）や横光利一『旅愁』（1937 - 1946）における芭蕉の使用が目につく。横溝とほぼ同時代人である横光利一（1898年生れ、横溝は1902年生れ）は、戦中から戦後にかけての疎開先での体験を日記体で書いた長篇『夜の靴』（1947）においても芭蕉の句を使用している。『獄門島』の一年前の刊行となるこの作品の「芭蕉」使用は『獄門島』とは対照的な使用のされ方であり、比較としてその部分を引用してみよう。

淡海のみゆふなみちどりながなけば心もしぬにいにしへ思ほゆ （人麿）

何と美しい一行の詩だらう。これを越した詩はかつて一行でもあつただらうか。たとへこのまま國が滅ぼうとも、これで生きた証拠になつたと思はれるものは、この他に何があるだらう。これに並ぶものに、

荒海や佐渡によこたふ天の川 （芭蕉）

今やこの詩は実にさみしく美しい。去年までとはこれ程も美しく違ふものかと私は思ふ。

28

こうした横光の芭蕉の俳諧使用には、個人を超えた領分と芭蕉との接続が見受けられ、一種の厳肅さが漂う。もっとも、こうした真摯かつ遊びのない芭蕉使用は、横光一人のものではなく、「明治期以降は、俳人が教導職として当時の教部省の役人に採用されるなど、その社会的地位が向上してゆくのに応じて、芭蕉はもはや単なる俳諧師ではなく、時代をリードする詩人、文学者へと変容していった時期」<sup>29</sup>を通して熟成された芭蕉像の反映でもある。明治期の幸田露伴の小説にはまだ見られた芭蕉の句を諧謔的に用いる態度は、大正、昭和戦前を通し、次第に硬直した「芭蕉」使用に変化していた。

そして、上記の流れを踏まえて横溝正史の『獄門島』における芭蕉の俳諧使用に向き合うとき、改めてその斬新さ・大胆さが浮き彫りとなる。確かに、横溝以前の小説に芭蕉句が使用された場合にも、はっきりした「見立」ではないにせよ、芭蕉の「世界」は喚起されてきた。しかしながら、それらの使用は、芭蕉の俳諧とその「世界」を意想外の場に重ねる例ではなく、その句に既に付与された価値に「ふさわしい」状況下での予期し得る使用法であった。それに対し、『獄門島』における芭蕉は、俳諧の一面である諧謔性・遊戯性を表出し、芭蕉の俳諧とはこのように使用してもいいのだ、という前時代と一線を画する宣言的な使用であった。無論、横溝によるこうした芭蕉や其角の俳諧を「見立殺人」に用いる試みもまた時代と無関係ではなく、戦に敗れ、桑原武夫による「第二芸術」論が出る風潮に至って、この使用は現実となったのであろう。登場人物の視点に戻して考えるならば、島の長である嘉右衛門の遺志であれ、「見立殺人」として芭蕉を使用する試みは戦中であれば控えられたであろう。すなわち、二節三節において「封建的な」「前近代の言説の集積」として、さらに本節でも推理小説との比較において「封建的な」島に相応しいと結論づけた『獄門島』の俳諧使用は、昭和戦前以前の「芭蕉」使用の例と比較するならば、それは同時に「戦後的な、あまりにも戦後的な」<sup>30</sup>使用でもあつ

た。そして、この『獄門島』の後には、小林信彦『ちはやふる奥の細道』（1983）、『ゴーストバスターズ 冒険小説』（1997）など、「古典」としての評価に収まらない芭蕉の俳諧及び芭蕉像の使用が継続していく。斎藤栄『奥の細道殺人事件』（1970）、井沢元彦『芭蕉魔星字陣』（1988）など、エンターテインメントの分野における使用の加速も『獄門島』が先鞭をつけた結果であろう。

さて、本稿では『獄門島』において芭蕉の俳諧はどのように使用されているのか、を問いに、第二節と第三節では登場人物の視点に立ち、その使用の特異性を考察してきた。第二節では、金田一によって語られていない事件の謎＝趣向として、「見立殺人」における被害者の三人、加害者の三人の立場の必然性を、喚起される歌舞伎や芭蕉の「世界」と共に論じ、第三節では真犯人の嘉右衛門と探偵金田一を中心に、彼らの果たす役割を確認した。結果、『獄門島』の重層的な世界を明らかにし、「前時代の言説の集積」としての『獄門島』を提示した。また第四節では、特異な俳諧の使用を示す『獄門島』が日本文学のなかでどのように位置づけられるのか、二つの比較検討を行なった。前半では松本清張を中心とする推理小説との比較を通し、俳諧を謎に結びつける先駆的作品として、「封建的な」島に相応しい趣向を用いた小説として『獄門島』を位置づけた。同じく四節の後半では芭蕉の俳諧を含む近代小説との比較を通し、戦中までの抑圧された芭蕉を解放する小説として『獄門島』を論じ、この「見立殺人」が実のところ「戦後的な」使用でもあることを確認した。すなわち、『獄門島』は前時代へのベクトルと同時に、四節を通して見てきたように後の時代に向けての確固たるベクトルを備えているのであり、結論として『獄門島』における芭蕉の俳諧は「芭蕉」使用の（推理小説の面では俳諧使用の）分水嶺となっている。

今後の課題としては、本論では『獄門島』の詳述に論が偏ったこともあり、推理小説というジャンルあるいは横溝正史と俳諧・古典の関係について論じきれなかったため、今後はその全体像を広く捉えることを目標としたい。

## 注

- 1 五味渕典嗣「横溝正史と戦後啓蒙—『獄門島』試論—」『大妻国文』第四一号、七十八頁、2010年。
- 2 植木朝子「事件と俳諧——『獄門島』への注解」、江藤茂博・山口直孝・浜田知明編『横溝正史研究3』、百四十四～百五十三頁、戎光祥出版、2010年。砂部史城「『獄門島』の動機と犯罪が起こる条件について」『『新青年』趣味』第一七号、三百十六～三百二十頁、2016年。『獄門島』を主題とする論文としては他に、真山佳乃「横溝正史論—『獄門島』を中心に—」『日本文学ノート』第三七号（通巻第五九号）、二十九～五十四頁、2002年がある。
- 3 吉田司雄「探偵小説という問題系——江戸川乱歩『幻影城』再読」、吉田司雄編『探偵小説と日本近代』、三十頁、青弓社、2004年。
- 4 『獄門島』は『宝石』に1947年1月から1948年10月にかけて掲載された。本稿では、横溝正史『横溝正史自選集2』、出版芸術社、2007年を底本として用い、『獄門島』本文からの引用はその頁数のみを示している。
- 5 正確には、ヴァン・ダインやクリスティーのトリックは「童謡殺人」と呼ばれていた。山

- 口雅也「解説」、S・S・ヴァン・ダイン『僧正殺人事件』日暮雅通訳、四百三十四～四百三十九頁、東京創元社、2010年を参考。
- 6 横溝正史「『獄門島』回顧Ⅱ」、横溝正史『横溝正史自選集2』、二百九十五～二百九十八頁、出版芸術社、2007年。
  - 7 高橋則子「『見立』と『やつし』試論」、国文学研究資料館編『図説「見立」と『やつし』—日本文化の表現技法—』、二百十頁、八木書店、2008年。
  - 8 同上書、二百十六頁。
  - 9 丸谷才一・山崎正和『半日の客 一夜の友』、四十九頁、文藝春秋、1998年。
  - 10 田中優子『江戸の想像力』、百二十一頁、筑摩書房、1992年。
  - 11 その他にも『獄門島』に見立の効用を見出すことができる。山崎は「“見立て”の中には、プラス面とマイナス面、両方入っている」（丸谷・山崎、前掲書、同頁）とも述べているが、このことを『獄門島』の登場人物に当てはめると、例えば、島の網元の嘉右衛門は「太閤」と島の人々から呼ばれ、そのように見立てられている。その彼は愚かな息子を持ち、家の未来を憂いながら亡くなるという運命を辿る。つまり、嘉右衛門は見立てられた「太閤」秀吉のプラスの面もマイナス面も背負うのである。
  - 12 「梅の木」について、本文には「見事な梅の古木がある。千光寺自慢の梅で、高さ渡り廊下の屋根をこえ、南にのびた枝は五間に達する。幹はひとかかえはあろう。周囲に柵を設け、幹のそばには立て札が立ててあり、何やら曰くが書いてあるらしい」（五十一頁）とある。こうした梅の木の存在が、其角の句を殺人に用いる発想の源にあるのではないのか。なお、この立札の「曰く」については「柵に囲まれ高札の立った桜の木の出て来る「積恋雪関戸」が踏まえられているのは、確かであろう」（砂部、前掲書、三百十九頁）と先行論で考察されている。ここから、花子の積もる恋と劇の『積恋雪関戸』がかけられていることも考えられる。
  - 13 植木、前掲書、百四十九～百五十頁。
  - 14 本文「くわっと大きくひらいている」（六十九頁）や「黒髪が、からす蛇のように」（七十頁）という表現からは、殺人以前に金田一が花子たち姉妹を「ゴーゴンの三姉妹」に見立てた趣向の現実化を観取することもできる。
  - 15 安東次男の「兜の下には白髪首ならぬ一匹の黒いコオロギがいた、というのが趣向の狙である。話に聞く老武者の鬢霜も、むろん黒く染められていた。意外性を変身譚のたねに使った仕立は、句づらに白の字などどこにもないが、実盛の洗い首のかわりならもしや老コオロギはめでたい白髭であったやもしれぬ」（安東次男『古典を読む おくのほそ道』、二百十五頁、岩波書店、1996年）という解説を参考。なお、後の月代の殺人の際の背景を考える際にも同書を参考にしている。
  - 16 植木、前掲書、百四十八頁。
  - 17 横溝正史「未発表日記・昭和二十二年 桜日記・第二部」『幻影城』五月増刊号、二十八頁、1976年。
  - 18 芝居好きかつ雑俳好きである点も、「上客達は芝居茶屋へ引き上げて、酒食をします。時間を持てあました人達が暇つぶしに言葉遊びをしたのが、雑俳の簡単に出来るものだった」（佐藤紫蘭『短詩文芸のバイブル雑俳諧作法—言葉遊びのいろいろ—』、四～五頁、葉文館出版、1999年）ことを考えると、嘉右衛門の性格として適合している。
  - 19 具体例として、本文では「見立料理合わせ」が引かれている。「忠臣蔵十二段返し」のお題

に、どのように見立てた料理を出すのか、その趣向を競い合うという例である（二百四十三頁）。

- 20 鍋島弘治朗『メタファーと身体性』、二百三十九頁、ひつじ書房、2016年。
- 21 鍋島、同上書、二百四十一頁。
- 22 鍋島、同上書、同上頁。
- 23 鍋島、同上書、二百四十三頁。
- 24 嘉右衛門と金田一が合致する理由として、彼らの作中の「位置」を考えることも有効であろう。嘉右衛門の住居は島の住民を見下ろす場所に位置しており、金田一もまたさらに上部の寺で寝泊まりしている。彼らは、他の島民と異なり、常に俯瞰的な視点を内面化している。
- 25 江戸川乱歩「「俳諧殺人」の創意」『別冊宝石』第二巻第二号、六十八頁、1949年。
- 26 『風炎』の初出は『ヤングレディ』1964年7月～1965年8月であるから、後の『おくのほそ道』を舞台とする多くの推理小説の先駆けではある。
- 27 外村彰「岡本かの子「東海道五十三次」——“時代”の隠喩を視座として」『昭和文学研究』第五〇集、三十九頁、2000年。
- 28 横光利一『定本横光利一全集 第一巻』、三百七十九頁、河出書房新社、1982年。
- 29 堀切実・藤原マリ子「国語教科書にみる『おくのほそ道』」、堀切実編『『おくのほそ道』と古典教育』、十七頁、学文社、1998年。
- 30 横溝正史『獄門島』の第二十五章の題目は、「封建的な、あまりにも封建的な」であるが、この小説は「戦後的な、あまりにも戦後的な」芭蕉使用を描いてもいる。

### 参考（引用）文献

- 江戸川乱歩「「俳諧殺人」の創意」『別冊宝石』第二巻第二号、六十八頁、1949年。
- 五味淵典嗣「横溝正史と戦後啓蒙—『獄門島』試論—」『大妻国文』第四一号、七十七～九十一頁、2010年。
- 砂部史城「「獄門島」の動機と犯罪が起こる条件について」『『新青年』趣味』第一七号、三百十六～三百二十頁、2016年。
- 外村彰「岡本かの子「東海道五十三次」——“時代”の隠喩を視座として」『昭和文学研究』第五〇集、三十～四十三頁、2000年。
- 植木朝子「事件と俳諧——『獄門島』への注解」、江藤茂博・山口直孝・浜田知明編『横溝正史研究3』、百四十四～百五十三頁、戎光祥出版、2010年。
- 高橋則子「「見立」と「やつし」試論」、国文学研究資料館編『凶説「見立」と「やつし」—日本文化の表現技法—』、二百十～二百十九頁、八木書店、2008年。
- 堀切実・藤原マリ子「国語教科書にみる『おくのほそ道』」、堀切実編『『おくのほそ道』と古典教育』、七～三十六頁、学文社、1998年。
- 山口雅也「解説」、S・S・ヴァン・ダイン『僧正殺人事件』日暮雅通訳、四百三十四～四百三十九頁、東京創元社（創元推理文庫）、2010年。
- 吉田司雄「探偵小説という問題系——江戸川乱歩『幻影城』再読」、吉田司雄編『探偵小説と日本近代』、九～三十七頁、青弓社、2004年。

安東次男『古典を読む おくのほそ道』、岩波書店（同時代ライブラリー）、1996年。

内田隆三『ロジャー・アクロイドはなぜ殺される？——言語と運命の社会学』、岩波書店、2013年。

齋藤慎爾編『俳句殺人事件 巻頭句の女』、光文社（光文社文庫）、2001年。

佐藤紫蘭『短詩文芸のバイブル雑俳諧作法一言葉遊びのいろいろ』、葉文館出版、1999年。

田中優子『江戸の想像力』、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、1992年。

鍋島弘治朗『メタファーと身体性』、ひつじ書房、2016年。

丸谷才一・山崎正和『半日の客 一夜の友』、文藝春秋（文春文庫）、1998年。

横溝正史『横溝正史自選集2』、出版芸術社、2007年。

横光利一『定本横光利一全集 第一一巻』、河出書房新社、1982年。